

## 「西征の賦」における人間觀

藤原 尙

從來の中國文學史では、魏晉の賦は全然顧みられないか、また顧みられたにせよ、虚無、玄言、浮華、形式主義等の評語で軽く扱われているようである。しかし、魏晉の賦をそのような先入觀に捉われることなく虚心に讀むとき、軽く見過すには餘りにも眞面目な心情が溢れているのがわかる。勿論駄作もないではないが、概して世界や人生について深く思ひを廻らした作品が多い。賦家たちは、賦の中にこそ、彼等の經學、歴史、文學その他ありとあらゆる教養を盛り込んだのである。兩漢時代に長賦が多かったのは周知の通りであるが、魏はしばらくおくとして、晉に至って、兩漢時代に勝るとも劣らない長賦が作られ、單なる片手間の仕事でなく、堂々とした一家言をなしている。このような長賦を一つの思想で捉えようとしても無理であるので、人間についてどう捉えているかを考えてみなくてはならない。ここで人間というのは人という意味ともう一つの意味である人間社會という意味を兩方含むものである。魏晉の賦のうちで文選卷十に載る「西征の賦」を取り上げ、彼の生き方を通して人間觀を探ることにする。

一

文選卷十の「西征の賦」の李善注に、臧榮緒の晉書を引き、「岳、

長安の令となりて『西征の賦』を作る。行歴を述べ、經る所の人物山水を論ず」という。なる程紀行を續け、目にうつる舊跡やそれにまつわる人物、事件を論じているには違いないが、出發地洛邑から長安に至るまでの道中こそは、古代周王朝より漢帝國に至るまでの諸國家が治亂興亡をくり返した場所であり、道中に見出す些少な遺跡にも歴史を認識させるものがあつたであらう。文選卷九に載る「北征の賦」「東征の賦」にも歴史的な事件が詠みこまれてはいるが、その内部において發展的に捉えられていない。「西征の賦」では一見斷片的感想の羅列に見えるが、國家、人物についての描寫に生成、發展、消滅の過程が明確に浮き彫りにされている。ここで潘岳の世界觀といえは大きさであるが、この賦における事物を觀る根底になる考え方が問題となる。この賦の冒頭で、

古往今來、邈として悠なる哉。寥廓惚恍、一氣を化して三才を甄にす。三才なる者は天・地・人の道にして、唯生と位とのみ大寶と曰ふ。生に脩短の命有り、位に通塞の遇有り。鬼神も能く要むるなく、聖者も豫めすること能はず。

と述べる。「寥廓惚恍」の「惚恍」は老子の道の體である無狀の狀、無物の象である。三才について李善は列子を引くが、これは易の繫辭

下・説封に見える語である。更に「生と位のみ、これを大寶という」も易の繫辭下に由るものと考えられるが少し異って引く。このように易によりながらも彼の考えは易と少しく異なるようである。潘岳は「生」と「位」とを聖人すら知り得ないとしているのに對し、易では繫辭上で聖人はそうした微妙なものを知り得るとする。潘岳の「位」とか「生」とかはつまり天命と考えられるが、彼自身それを知り得る人もあることを認めてはいる。この賦より後の作である「閑居の賦」の序に、「顧みて常に以爲らく、士の生るるや、至聖軌なく、微妙玄通せる者に非ざれば、必ず功を立て事を立て當年の用を効さん。是を以て忠を資り信を履み以て徳を進め辭を脩め誠を立て以て業に居らん。」と述べているのがその證據である。してみると、「聖智も知る能はず」というのは、潘岳自身のことを述べたものであり、かつ彼の取るべき態度でもあったのではなからうか。

彼が歴史的遺跡に對するときも、やはり天命は豫知し得ないという前提にたち論じている。この賦で彼が華陰の野を過ぎるとき、

江使の璧を反し、亡期を祖龍に告げしむるを憶ふ。怪を語り異を徴せず、我これを孔公より聞けり。

と述べる。史記始皇本紀によれば、始皇の使者が關東より華陰の平舒の道を通ったところ、ある人が璧を持って遮ぎり、自分に代つて瀆池君に贈つてくれと言ひ、更に今年祖龍（始皇）は死ぬると告げた。瀆池君とは武王で始皇の荒淫が紂のようであるから、武王に命じて紂を伐つべく託宣が下つたと張晏は解している。潘岳はこのような不合理な神怪説には賛成できないとして、論語述而篇の「子、怪・力・亂・神を語らず」の意を汲む。

また辰園を通つたとき、

辰園を湖邑に弔らふ。諒に世の巫蠱に遭ふ。隱伏を明らかにし難きに探り、讒賊の趙虜に委ぬ。顯戮を儲貳に加へ、肌膚を絶ちて顧みず。歸來の悲臺を作り、徒らに望思するも其れ何をか補はん。

と述べる。辰太子の事件は漢書卷六十三辰太子傳に載る。これは江充によつて起された巫蠱の獄で太子は江充を斬り、自殺した。武帝はその無辜を哀しみ、思子宮を作り、その上、湖畔に歸來、望思の臺を建てた。潘岳はこのことを、「徒らに望思するも其れ何をか補はん」と難詰の口調で批判し、江充のなすがままにさせ、皇太子を殺戮せしめた責任はすべて武帝に在るとする。その點に關して、漢書辰太子傳贊では次の如く述べる。「巫蠱の禍、豈哀しからざらんや。此一江充の辜のみならず、亦天の時有り、人力の致す所に非ざるなり。建元六年蚩尤の旗見はれ、其の長さ天を竟ふ。後遂に將に命じて出征し、河南を略取し、朔方を建置せしむ。其の春辰太子生る。これより後師行はること三十年、兵の誅屠夷滅して死するもの、數ふるに勝ふべからず……」と。班固の觀方は人力よりも天命の方をより重視しているが、潘岳のは人間の問題として武帝を責めているあたり、合理的に考えていこうとする態度が窺われる。

こうした態度は彼の生活體驗や思想の由りどころにも見出される。この賦は晉の惠帝の元康二年（文選注所引の岳の弱子を傷むの序に由る）に作られたものであるが、その前の年には、賈后と楚王瑋とが共謀して楊駿を誅した。潘岳は楊駿の主簿であつたので、坐して罪せられる筈であつたが、河陽の令であつた頃の知人公孫宏のとりにして危うく死を免れたのであつた。彼はまずこの賦で自己の生き方と楊駿のあくことのない權勢欲とを批判しているが、この事件をあくまでも人間の過誤によつて起つたとし、人力で避け得られると考えている。

彼の負荷の殊に重きは、伊周と雖も其れ猶ほ殆し。七賢を漢庭に窺ふに、壽か一姓の在るあらんや。危明むるなく以て位に安んじ、祇逼に居りて以て專を示す。亂逆に陥りて戮を受く、禍の降ること天自りするに非ず。

負荷とは先祖の遺業を繼承することであるが、ここでは、天子の補佐としての地位を意味する。それは伊伊周公のごとき聖哲ですら難しい大役であったし、その任にあった西漢の七貴(呂・霍・上官・趙・丁・傅の外戚)は、悪くて族滅、良くて放流の運命をたどった。このような例が嚴としてあるにもかかわらず、楊駿は武帝の臨終に際し、武帝の遺命である、「汝南王亮と駿とに王室を夾輔させよ」との詔勅を不服に思い、娘楊后をして武帝に駿のみに輔政の任を授けるように上奏させた。駿の貪らんさが禍敗を招いたのであって、天が降したのではないとする。と同時に彼自身が取った行動をも反省する。

鄙夫の常に累ふを嗟ぎ、固より既に得て失ふを患ふ。柳季の直道なく士師を佐けて一たび黜けらる。

李注引く所の臧榮緒の晉書によれば、岳は弱冠で太尉府の掾に任ぜられ、廷尉平に召されたという。「士師を佐く」とはその當時を指すと考られるが、やはり、楊駿の事件に連坐しそうになつたのも、「既に得て失ふを患ふ」性向に由ると考えられる。言うまでもなく、「既に常に累ふを嗟ぎ、……」以下は論語をふまえているのであって、その陽貨篇に、「鄙夫はともに君に仕ふべからず、其の未だこれを得ざるや、これを得んことを患ひ、既にこれを得ては、失はんことを患ふ。至らざるることなし。」とある。鄭注では「至らざるることなし」とは、「其の邪媚爲さざる所なし。」と解している。また「柳季の直道……」も論語微子篇の柳下惠の言である「直道にして人に事ふ。焉に往

きて三たび黜けられざらん」をふまえて述べられたものである。孔子や柳下惠の言に背き、自己の正道を踏むことなく免ぜられたのを恥じている。論語の生き方を基範とするが、非は自己の行爲に在るとしてゐる。ただ非は認めても出處進退を誤まつたと自覺してゐるのであって、この時點において消極的になり隱遁を願つたりするのではない。潘岳は前のことを、

孔、時に隨ひて以て行職し、蘧、國と與に舒卷す。苟も微を蔽ひて以て章を繆る。過辟の未だ遠からざるを患ふ。

のように述べてゐる。論語衛靈公篇にのる、「君子なるかな蘧伯玉、邦に道あれば則ち仕へ、邦に道無くんば卷きてこれを懷にすべし。」の故事を引用するが、これは楊駿に仕えた自己を反省してゐるのである。過誤は認めながらも、それが隱遁へと結びつかない。

山潛の逸士の卓として長へに往きて返らざるに悟り、吾人の拘擯し、飄飄として蓬のごとく轉ずるを陋とす。

の如く、隱遁者に理解ある態度を示し、自己を陋だとしながらも、あくまでも出仕したい氣持ちでゐる自己をいとおしんでいる。晉書の潘岳傳においても、「岳、才名世に冠たり、而るに衆の疾む所となり、遂に栖遲すること十年、出でて河陽の令となる。其の才を負みて鬱鬱として志を得ず。」とあるように名聲に適う職がなく悶々の情を懷いてゐた。ただ仕官するというだけではなく、政治に對して並々ならぬ意欲が窺われる。この賦の末尾に、

爾して乃ち策を端し茵を拂ひ、冠を彈じて衣を振ふ。鄧錡を徘徊し、渴するが如く、飢ゑたるが如く、心翹翹にして以て仰ぎ、敬を加へずして自ら祇しむ。豈三聖の敢て夢みんや、竊かに十亂の希ふことあり、

と述べる。鄆は周の文王の都、鎬は武王の都である。三聖（文王・武王・周公）を理想として私淑するのは畏れ多いが、せめて十亂（周公旦・召公奭・太公望・畢公・榮公・太顛・閔天・散宜生・南宮适・文母など）の如き人物になりたいと願っている。論語述而篇の「甚しいかな、吾の衰へたるや、久しく周公の夢を見ず、……」をふまえながら少し控え目に政治に參與してすぐれた治績を残したい意向を述べる。

以上のことより、潘岳は、人間の存在を天、または天命によって定められたとせず、人間の意志やまた努力で變えることが出来ると考えていることがわかる。但し彼の他のジャンルの作品、例えば詩においては「天命」や「運命」について詠ずる場合もないではない。「悼亡の詩」で「上は東門吳に慙ぢ、下は蒙莊子に愧づ。詩を賦し志を見はさんと欲するも、零落具に紀し難し。命や奈何すべき。長戚自から鄙ならしむ。」と詠じ、「子を思ふ詩」に、「造化品物を甄り、天命代るがわる虚盈す」とあるように、「天命」という語を用いる。これらの詩は挽歌ともいふべきもので、「西征の賦」とは發想の基盤を異にする。一方は現在より過去への追懷であるに對し、一方は現在から未來への志向を示すものである。

## 二

潘岳の「西征の賦」の對象とするところは自己の志向と歴史的事象であつて、大體において潘岳と同時代の人物や事象ではない。それでは、潘岳の時代または後世に全く無關係かというところではない。これは賦の價值についての問題となるが、司馬遷が史記の司馬相如傳の末尾に、相如の賦を論じて暗示的意見を述べていることが、潘岳の賦についてもあてはまると考えられる。司馬遷の説は、「春秋は見を推

「西征の賦」における人間觀

して隠に至り、易は隠に基づいて顯にゆく」とし、説く所は異なるけれども、徳に合するという點では同じであるとし、相如の虚辭濫説も節儉を導くためのもので、詩の風諫と變わるころはないとする。潘岳のこの賦はあくまで、春秋のような發想をとっているものであつて、歴史的人物・事象をどのように受けとめているかがこの賦の最も興味ある點をなし、この賦の生命ともいふべきものである。若しこの「西征の賦」が、左傳・史記・漢書等の單なる受け賣りに過ぎないとしたら、どうしてあのような長賦を作るに耐え得たであろう。彼は歴史上の人物に、人間または人間の在り方を語らせたといつて差しつかえないであろう。

以上のような見地からこの「西征の賦」で歴史書の事象を如何に解釋しているかをみることにする。先ず左傳莊公二十二年の條に載る子頽（莊王の妾の子）の叛亂について、

匡北の兩門を望み、虢鄭の恵を納るるに感ず、子頽の禍を樂しむを討ち、闕西の辰に効ふを尤む。

の如く述べる。この事件は左傳では、次の通りである。子頽が恵王を王城より追ひ拂ひ、掠奪の限りを盡し、五大夫の功勞をねぎらい六代の樂を舞った。恵王方の鄭伯が虢叔を見て、「哀樂が時宜を得ないと殃咎が必ずやつてくると聞いているが、今王子頽が王位を犯しなから、その大禍を樂しんでいる。」と言ひ、「禍に臨んで憂ひを忘る。憂ひ必ず及ばん」と結び、虢公とともに恵王を入れる計畫を進める。鄭伯が恵王を推し立て匡門より入り王子頽と五大夫とを殺し、闕の西辟で宴を催したが、子頽の時と同じく六代の樂が備わっていた。原伯が「鄭伯尤めに傲ふ。其れ亦咎有らんとす。」と評しているのである。賦中で「子頽の禍を樂しむを討ち、闕西の辰に効ふを尤む」と述べる

のは左傳の事實を批判することなく受け入れている。左傳では尤めたのは原伯であるが、岳はそれを自分の意見として出している。左傳では號公・鄭伯の忠誠な心に感じそれを善しとする一方、子類の禍を樂しむ不義に倣ったのを責め、褒貶の義を明らかにする。賦においてもこの部分だけ讀めば、そういう風にもとれようが、他の箇所と連關させて考えるとき、もっと深い意味で引いていることがわかる。それは人間の運命の微妙な移り変わりという點に關してである。

左傳僖公三十二年の傳に載る秦の穆公の故事を詠じて、

臯は墳を南陵に記し、文は風を北阿に避く。蹇、孟に哭するに敗るるを審にし、襄、墨纒以て戈を授く。曾ち隻輪すらこれ反らず、三帥を縶ぎて以て河を濟る。庸王の矜愍に値へば殆ど叔を朝市に肆せん。任好、綽として其れ餘裕あり、獨り過を引きて己に歸す。三敗を明かにして黜けず、卒に晉を陵ぎて以て恥を雪ぐ。豈虚名の立つべけんや。良に覇を致す、其れ以有り。

と述べる。その事件は鄭の杞子より穆公あてに、軍隊を差し向ければ内通する旨の手紙が来たことより始まる。穆公は蹇叔に謀ったが、同意が得られず、獨斷で孟明・西乞・白乙に軍隊を出動させた。蹇叔は孟明とわが子に軍の敗北を豫言するが、果して襄公が墨纒のまま秦師を伐ち大敗させた。孟明以下が歸國したとき、「吾一晉を以て大徳を掩はず」とい罪を許した。孟明等のたび重なる失敗をも穆公は尤めず最後まで信用しつづけ、勝利を収めることができた。「遂に西戎に覇たるは、孟明を用ふればなり」と左傳では結んでいる。穆公の寛仁が秦國の運命を變え、先の敗北が勝利とかわり、西戎に覇となったのである。

こうした見方を幽王・始皇帝の場合にも試みている。

犬戎の侵地を履み、幽后の詭惑を疾む。僞烽を擧げて以て衆を沮

ち、嬖褒に淫して以て匪を縱いままにす、軍は戲水の上に敗れ、身は驪山の北に死す。赫赫たる宗周、滅びて亡國と爲る。

また此に繼ぐものあり。異なるかな、秦の始皇の君たるや、天下を傾けて以て厚葬す。開關よりして未だ聞かず。匠人勞して圖らず、生きながら埋め以て勤に報ぜしむ、外西楚の禍に罹り、内牧豎の焚を受く。語に曰く、行に禮無くんば、必ず自ら及ぶ。此其の効に非ざるか。

「語に曰く」の言は左傳隱公六年に君子の言として、「惡を長じて俊めずば、自ら及ばん」とあるに由ると考えられる。自己の惡業の結果を自分で受けるのである。してみると、現在おかれている運命は過去の行爲の積み重ねが招いたもので、易の坤卦に「善を積むの家に餘慶有り」とか、「不善を積むの家に餘殃あり」というに等しく、人間の意志・努力によって變えられるとする儒家の思想に基づく。

儒家の思想のみならず、道家の思想からも運命の移り變わりをのべた例がある。項羽の暴逆を記した部分を擧げる。

山川を眇て以て古を懷ひ、悵として轡を中塗に攬る。項氏の暴を肆いままにし、降卒の無辜なるを坑にしたるを虐とす。秦人を激して以て徳に歸せしめ、劉后の來蘇を成す。事回次して還すを好む、卒に宗滅され身屠らる。

ここで述べる「還すを好む」という語は老子第三十章の「道を以て人主を佐くるものは、兵を以て天下に強からず。その事還すを好む。師の處る所は、荆棘生ず。大兵の後には必ず凶年有り。善なるものは果にして止む……」に由る。この賦では秦の降兵二十餘萬人を坑埋めにした項羽の殘虐な行爲が、自分の身に反り、族滅の運命を辿るに到ったとしている。

また西漢の後宮の奢侈について、

面朝の煥炳を較ひ、後庭の猗靡たるに次る。當熊の忠勇を壯とし、辭輦の明智を深しとす。衛寶髪して以て光鑿し、趙輕體にして纖麗なり。咸善立ちて聲流るるも、亦寵極まりて禍移る。

と述べる。漢書外戚傳贊に、「富貴を極むるに功を以てせず、此れ固より道家の畏るる所なり」とあり、更にそのものとなる老子には、「富貴にして驕れば、自らその咎を遺す」(第九章)とあるが、「寵極まりて禍移る」の意味内容は、老莊の考え方をふまえながら、衛・趙など各皇后が慘禍を被った實例より、運命の移り變わりを述べたものであろう。

次に歴史的現象を流轉もしくは無常の相の下で把握している例をあげてみるに、漢の武帝の雄略を次のように述べる。

命には始め有りて必ず終り有り。孰か長世にして久しく視ん。武雄略其れ焉にか在る。近くは文成に惑ひて五利に溺る。靈若神鳥に翔り、奔鯨浪して水を失ふ。鱗骼を漫沙に爆し、明月を隕して雙墜す。仙掌を擢んで以て露を承け、雲漢を干して上り至る。邛笏を致すに其れ奚ぞ難からん。惟余欲して是れ恣にす。逸遊を角觥に縱いままにし、甲乙に絡ふに珠翠を以てす。生民の半ば減ずるを忍び、東岳を勒するに虛美を以てす。超として長く懷ひて遐に念ひ、循環の賜無きが若し。

漢書武帝紀の贊では、次のように武帝の功績を稱える。百家を黜け儒教を尊重し、海内の英才と事を謀り、郊祀を修め、正朔を改め、音律を調べ、封禪の儀式を行ったのは三代の偉業にも比すべきであるとし、「如し武帝の雄才大略にして、文景の恭儉を改めず民を濟はば、詩書の稱する所と雖も、何ぞ加ふること有らん。」とまで言う。但

し同書の昭帝紀の贊では、「孝武の奢侈餘敝師旅の後、海内虛耗、戶口半ば減ずるを承く。……」と武帝の奢侈を刺る。潘岳のこの賦では、武帝の奢侈に對する諷刺に近いようであるが、この偉大な皇帝ですら死を免れ得ず、彼の殘した數々の業績も殆ど跡かたなく消え去ったことに感慨を催しているのである。武帝に關してもう一つ、彼の作つた昆明の池についても、

其の池は湯湯汗汗、澗澗瀾瀾として、浩きこと河漢の如し、日月天に麗り、東西に出入す。且には湯谷に似、夕には虞淵に類す。昔は豫章の名字にして、玄流を披きて特起す。景星を天漢に儀し、牛女を列べ雙つながら時たしむ。萬載にして傾かざるを圖るに、奄に十紀に摧落せり。百尋の層觀を擢んぜるも、今數仞の餘趾のみ。振鷺ここに飛び、鳥躍り鴻漸す。雲に乘りて頭頰し、波に隨ひて澹淡たり。鷺波に瀟瀟し、陵茨を唼喫す。華蓮淥沼に爛として、青蕃翠澌に蔚たり。伊れ妓池の聳めて穿るるや、水戰を荒服に肆ふ。志遠きを勤めて以て武を極め、良に後福に要なし。而して菜蔬毛實、水物惟れ錯り、乃ち原陸に瞻ひあり、皇代に在りて物土あり、故にこれを毀ちて又復す。

と述べる。武帝が末代永遠に残そうとした層觀も今はみるかげもなく荒廢し、昆明夷を征服せんがために、その地にある滇池に似せて作つた昆明池も、後世には役に立たないものとして殘る。ただ物産が豊富なので、諷刺した後はその意義を認めている。武帝の雄略について潘岳が批評するとき、流轉または無常の相より眺めているのであって、武帝の生存中のことではない。

屈原の離騷以來、歴史上の人物なり、事跡なりを賦に詠み込むことは、大いになされているのであるが、それは歴史上の人物が生存した

當時に反つて詠じている。離騷で重華に詞を陳べる時に、「啓九辯と九歌と、夏康娛しみ以て自ら縦にす。難を顧み以て後を圖らず、五子用て家巷に失はる。羿淫遊し以て佚田し、又夫の封狐を射るを好む。……」とあるが、それら人物の生存した時代の行動について述べる。また劉歆の「遂初の賦」で、「昔仲尼の淑聖なる、竟に蔡陳に隘窮す。彼屈原の貞專なる、卒に湘淵に放沈せらる。」と述べるのも同じである。同一の系統である、班彪の「北征の賦」、班固の「幽通の賦」、班昭の「東征の賦」に取り上げられる歴史的事象についても同様のことがいえるであらう。

潘岳の詩に於て歴史的事象もしくは人物の無常性は具體性はないが觀念としては詠まれている。例えば、「河陽縣の作」の一節に「誰か謂はん邑宰輕しと。令名劭しからざるを患ふ。人天地の間に生れて、百年孰か能く要めん。颺たること石を楅つ火の如く、瞥たること道を截る颺の若し。齊都に遺聲無く、桐郷に餘謠有り。謙に福するは純約に在り、盈を害くは矜驕に由る。人に君たるの徳は無きと雖も、民を視ること庶くば恍からざるを。」とある。この詩は晉の咸寧四年に作られたと考えられ、「西征の賦」に先んずること十二年前になる。「人天地の間に生れて、百年孰か要めん。……」から「齊都に遺聲なく、桐郷に餘謠有り」と説くあたり現世の榮華を冷眼視し、人間の眞の價値を求めている。齊の景公は馬千匹持っていたが、死んでしまうと誰もその徳を稱えるものはいなかったのに對し、朱邑は桐郷の小役人であったにも拘らず、民に愛敬され、その地に葬ると人々は祠を立てて祭つたという。この詩では死後もなお生きつづけるのは、その人の徳とか人望であつて、權力とか榮華ではないことを述べるが、この賦でも人間についてほぼ同じような觀方をしてゐる。ただこの賦では、遺

跡を目前にしている點、感動の響きが違ふであらう。

### 三

次にこの賦で實際にどのような人間を觀察し評價しているかを見てゆくことにする。先ず、周の武王について、

牧野に旋りて效を歴、愈々柔を守りて競を執る。夜且に申るまで寢ねられず、天保の未だ定まらざるを憂ふ。

と述べる。賦中の「競を執る」という表現は、詩經・周頌・清廟に「競を執る武王、競き無からんや、惟れ烈なり」とあるに由る。その詩經中の「無競」は毛傳、鄭箋の解釋によつたものであるが、潘岳は「柔を守る」という風に老莊的解釋をする。老子七十六章の「強大は下に處る、柔弱は上に處る」や、三十六章の柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ。」に述べる柔の徳を贊美している。殷を亡ぼして間もないころ、天子の地位の安定してゐないのを心配し、武王は寢る暇もなかつた程であつた。その謙虛な態度を「柔」としている。それに對して夏の桀王の態度を、

亡王の驕淫なるに鑒み、南巢に竄して以て命を投ず。積薪に坐して然ゆるを待ち、方に日を指して盛を比ぶ。

と述べ、滅亡が目前に迫つてゐるのに安逸を貪るさまを、さきの武王の慎重さと對照的に擧げ、「人の度量の乖舛せる、何ぞ相越ゆること遑迴なる」と論ずるが、滅亡與隆の因を徳に在ると見ている。

また漢の高祖についても論じてゐるが、ほぼ同じような觀方をする。夫れ漢高の興るや、徒だ聰明神武、豁達大度のみならず。乃ち實に終を慎しみ舊を追ひ、誠篤く愛敬にして、澤漸ならざるはなく、恩逮ばざるはなし、率土すら且つ遺さず、況んや隣里に於てをや、況

んや卿士に於てをや。斯の時に於けるや、乃ち舊里を羣寫し、新邑を製造し、故社易へ置き、粉榆遷し立て、街衢一の如く、庭宇相襲ふ。鷄犬を渾べて亂し放つに、各々家を識りて競ひ入る。

「聰明神武、豁達大度」という表現は李善の指摘するように、班固の述高紀（文選五十）や漢書に基づくが、潘岳もまた、人物の素質性格を重要視したからに違いない。が、潘岳が高祖を稱揚するのはもっとも深い所にある。恩澤が舊郷卿士にも及んだことを述べ、その徳をこの先で、

乾坤親有るを以て久しかるべく、君子は厚德を以て物を載す。

という。易の繫辭下では、「天地の道につき、乾（天）は易を以て治め、易であれば知り易く、知り易いときは親しみがあり、親しみがあれば久しく續く。これは聖人の徳で天地の化育に參與する」という意味のことを述べ、また易の坤卦で、「坤は厚くして物を載せ、徳は無疆（かぎりないこと）に合す」ということからして易の徳と合致することを言つたものと考えられる。潘岳の少し前輩に當る王弼は、坤卦の注に「地の无疆を得る所以は、卑を以て順ひ行ふの故なり」とする。卑というあたり、老莊の考え方と一致するようであるが、潘岳もほぼ同じように考えていたのではあるまいか。柔の徳である坤を剛の徳である乾と説くところに潘岳の意圖があり、高祖の天地の徳を體し、聖人の位に在ることを暗黙裡に認めている。

この賦の高祖に關する記述の後に、項羽側の粗暴的性格を述べ、高祖の人徳により天下を得たことを暗に示している。この潘岳の高祖觀は、司馬遷、班固が史記・漢書等で觀るのと異なる。司馬遷は高祖本紀の末に、太史公の言として、

夏の政は忠、忠の弊害は、小人が野になることである。故に殷人は

敬を以て繼承した。敬の弊害は、小人威儀多く、形式に流されることである。故に周人は文を以て繼承した。文の弊害は小人が輕薄になることである。そこで輕薄を救うには、忠に及ぶものはない。このように三王の道は循環して終るとまた反る。周秦の間は、文の弊害と謂うことが出来る。秦の政治は良くならず、反つて法を嚴しくした。なんと誤つていたことだらう。だから漢が興ると、弊害を除き、人心をして倦まないようにさせた。天統を得たというべきである。

という意味のことを述べる。風俗の弊を正すべく世界は變ることを把握し、辨證法的發展として漢の出現の必然性に觸れる。が人物に對しての明確な把握は見られない。また班固の漢書の高祖贊では、「漢、堯の運を承け、徳祖已に盛んなり。蛇を斷ち、符を著はし、旗幟赤を上げ、自然の應、天統を得たり。」と神祕的天命論で説明する。潘岳は漢の興隆の因を高祖の素質度量に負うものとして論じている。漢の出現を人間のみで考えるのは危険かも知れないが、少くとも潘岳はそうした人間を理想的人物と考えていたのであろう。人間の眞價を見つめていたといえる。

そのことは西漢の人物を評價するときにもいえよう。

夫の蕭曹魏邴の相、辛李衛霍の將、使を銜めば蘇屬國、遠きを震はすは張博望。教敷きて攀倫敘び、命を投じて高節亮かなり。稭侯の忠孝淳深なる、陸賈の優游宴喜なる、長卿、淵雲の文、子長、政駿の史、趙張三王の尹京、定國、釋之の聽理、汲長孺の正直、鄭當時の推士、終童山東の英妙、賈生洛陽の才士、翠綵を飛ばし、鳴玉を拖ぎ、禁門に出入するもの衆し。或は被髮左衽して泥滓に奮迅す。或は從容傳會、表を望み裏を知る。或は顯績を著はして時戮に嬰

り、或は大才有りて貴仕なし。皆清風を上烈に揚げ、令聞を垂れて曰まず。珮聲の遺響を想ひ、鏗鏘の耳に在るが若し。音鳳恭願の勢に任すや、乃ち四方を熏灼し、都鄙を震耀す。而して死するの日、曾ち夫の十餘公の徒と隸齒するを得ず。才難し、其れ然らずや。

ここに登場する人物は、その多くが漢書の公孫弘傳贊に載せられている。潘岳のこの賦では西漢全體から、公孫弘傳贊では武帝以降と、人物を取り上げる範圍が違ふので、比較は無理ではあるが、公孫弘傳贊に載せる儒學の士を一人もあげないのは、彼の見識を示すものではないかろうか。勿論潘岳の取り上げなかったのは、儒雅の公孫弘・董仲舒・倪寛、篤行の石建、石慶、質直の卜式、推賢の韓安國、定令の趙禹・張湯、滑稽の東方朔、枚臯、應對の嚴助、朱買臣、歴數の唐都・落下閔、協律の李延年、運籌の桑弘羊、受遺の霍光、また儒術で登用せられた梁丘賀、夏侯勝、韋玄成、彭嚴祖、尹更始、將相では張安世、杜延年、治民では黃霸、王成、龔遂、鄭弘、召信臣、尹翁歸、嚴延年など多方面に亘るが、儒術を以て出世したものがかなり多い。これに對し新たに取上げた人物といへば、將相では蕭何・曹參・辛慶忌・李廣など、その他では、陸賈、王章、王遵、王駿、賈誼、終軍などである。潘岳は學問のみに優れている人物より、實際に良い政治をしてゆく才能を重視しているのであろう。武帝以降の儒學の學風は、狩野直喜氏が、兩漢學術考で述べて居られる如く、一經專門であつて、學問が深いと同時に狭い。先に述べる公孫弘等もすべて専門があつて、董仲舒は公羊春秋、公孫弘は春秋雜說、倪寛は尙書というように各々の權威である。それに對し、潘岳のこの賦では、高祖の大業を完成に至らしめた蕭何、また、黃老の言を修め、相國となつては事務をとらず、ただ酒にばかり浸つた曹參、高祖に詩書を薦め、政治の要諦を説

いて新書を著わし、諸侯を歴遊し、呂后一派の陰謀を挫いた陸賈、儒老兼ね合わせる包容力を持った賈誼など、實際政治に貢獻した人物の能力を高く評價している。

潘岳は先にあげた人物を、論語泰伯の孔子の言である「才難しと。其れ然らずや。」をふまえて評價する。これらの才能は得難いとしてゐる。それも元皇后の同母弟の鳳とその従弟音などの、外戚の威をかり、功績なくして一時の榮華を誇るものや、弘恭・石顯のように、宦者あがりの天子の寵を専らにする連中が、死後何も残らずはかなくなつてしまふのに對し、才能・人物が後世に残ることを意味する。勿論才能といつても他人を不幸に陥れる才能ではない。

良人を簡び以て自らを輔け、斯忠にして軼賢なりと謂ふ。苛政を捐灰に寄せ、扶蘇を朔邊に矯る。儒林坑穿に填められ、詩書燭りて煙を爲す。國滅亡して以て後を斷ち、身刑轆せられ以て前を啓く。南法焉んぞ以て宿するを得ん。黃犬何ぞ復た牽くべけんや。

と述べるように、李斯・商鞅の過激な法治主義は、結局身を滅ぼし國を亡ぼす結果となつたという。

同じような例であるが、韓延壽が左馮翊であつた時、御史大夫蕭望之が延壽の東郡の太守の頃、公金千餘萬を費消した罪狀をあげようとしたりと、延壽は反つて望之が馮翊であつたとき公金百餘萬を費消したと、彈劾した。蕭望之は無實であつたので、延壽は棄市に處せられた。人民は涙を流さないものはなかつたという。

望之を許きて以て直を求む。亦余が心の惡む所なり。夫の人の政術を思ふに、實に幹時の良具なり。苟も法を明かにして憾を釋けば、才を愛みて以て務めを成さず。……

とあるところより、法律を守ることにとらわれ、人間性を無視したや

り方を悪んでいることがわかる。論語陽貨篇の「評いて以て直となすを惡む」によるものではあるが、漢書の贊では趙廣漢と共に論じ、「廣漢聰明下欺く能はず、延壽善に厲み、居る所風を移す。然れども上を計き信ならず、身を失ひ功を墮す」と述べ、「惡む」感情は入って居らない。論語に由つたものではあるが、微妙な心理の動きを捉えている。

#### 四

潘岳はこの賦の中で、自己にまつわる悲哀を詠じたところがある。都を離れ長安に向かう時に

皇、余の忠誠を鑒、俄に余に命ずるに末班を以てす。疲人を西夏に牧し、老幼を攜へて關に入る。丘、魯を去りて顧歎し、季、沛を過ぎて涕零つ。伊れ故郷の懐ふべき、聖達の幽情をすら疚ましむ。況んや匹夫の土に安んじ、逸として身を鎬京に投ずるにおいてをや。と述べ、孔子、漢の高祖のごとき聖人ですら故郷を離れるときには悲愁の情を免れ得なかつたのであるから、匹夫においては尙更だとする。故事を入れることによって説得力あるものとなっている。従來離郷の悲愁の情は宋玉の九辨などに見られるごとく、秋の景物を背景に述べられるのが普通である。劉歆の「遂初の賦」、班彪の「北征の賦」などについても同様なことがいえる。しかし潘岳は、そうした自然を背景に使うことなく、同じ立場にあった人間の情を陳べるのである。また新安でわが子を亡くしたときも、赤子を新安に天ひ、路側に坎してこれを瘞む。亭に千秋の號有るも、子に七旬の期なし。延吳に勉勵すと雖も、實に慟きを余が慈みに潛ましむ。

「西征の賦」における人間觀

と詠む。延陵の季子、東門吳の故事を引き、悲しみに堪えられない情を敘べる。潘岳の詩で肉親の死を主題にしたものは、「悼亡の詩」「子を思ふ詩」があげられるが、それらの背景には、秋の景物や季節の推移を詠みこみ、作者の感情を投影しているが、賦においては、そのようなことはなく、故事を羅列することによって作者の感情を表出しようとする。

しかし、この賦では、潘岳自身の「悲哀」の感情よりも、歴史上の罪なくして悲劇的運命を辿つた人物に對する同情の方が多くみられる。

左傳僖公二年の晉の荀息が屈産の乘と垂棘の璧で道を虞に借り號を伏つた事件に對し、「憐れむ」という。

曲肱を降りて號を憐れむ。與國を亡虞に託す。誘賂を貪りて以て鄰を賣り、臘に及ばずして拘れに就く。垂棘故府に反り、屈産晉興に服す。徳の建たずして、人の援けなく、仲雍の祀忽せなり。

更に左傳昭公二十三年から二十六年にかけて周の景王の嬖子子朝の亂があるが、「吞く」とし、悼ましい事件とする。

景悼より以て巧に迄るを吞く。政凌遲して彌々季なり。庶朝をして逆を構へしめ、兩王を歴て位を干む。

の如くである。

國家に忠節を盡しながら、反つて災禍を蒙つたものに對しても深く同情する。西漢の晁錯について、

景皇を陽丘に訊ぬ。奚ぞ譜を信じて矜諱なる。吳嗣を局下に隕し、蓋し怒りを一博に發せしならん。七國の亂と稱するを成し、翻りて逆を助けて以て錯を誅す。聽を過りて討つ無きを恨み、茲に善を沮みて惡を勸む。

と述べるが、鼂錯の誅せられたのを惜しむあまり、景帝を責問している。史記では、太史公の言として、「語に曰く、古を變じ常を亂すもの死せずんば則ち亡ぶ、豈錯等の謂か」と鼂錯の側を非としているが、漢書では、その贊で、「悲しい哉、錯終へずと雖も、世其の忠を哀しむ。」といい、錯に同情する。班固が鼂錯を忠とみるように潘岳も錯を善とみているが、錯が忠善でありながら禍いを蒙ったことに強い憤りを感じている。それを運命として諦めず、帝王に對する非難として表現した。

同じことが王章の場合についてもいえよう。

延門を過ぎて成を責む。忠何の辜ありてか戮せらるる。社稷の王章を陥れ、幽死して鞠せしむ。

というように、成帝に詰問する口調である。王章が「王鳳任用すべからず」と直言したのに對し、成帝は、「京兆（王章）の直言なかりせば、吾社稷の計を聞かず」とまでいったに拘らず、王章はのち鳳に陥れられ、囚われて獄中で死んだ。「忠何の辜ありてか戮せらるる」は正義感の發露とみてよいであろう。漢書の贊には、「王章剛直にして節を守り、輕重を量らず、以て刑戮に陥り、妻子流遷す。悲しい哉。」とあり、悲哀または愛惜の情であるが、潘岳のは強い憤懣となっている。

この外、平后（王莽の娘）について、「康園の孤墳を瞰、平后の專絮を悲しむ。厥の父の篡逆に殃し、漢恥を蒙りて雪がず、……」と述べるのや、後漢末、董卓の亂に、勤王のため命を捧げた人を、「百寮の勤王を痛み、威力を舉して死を致す。身首を鋒刃に分ち、胸臍を洞すに流矢を以てす。裳を褰げて以て岸に投ずるあり、袂を撰ひて以て水に赴くあり。浮楫の偏小なるを傷み、舟中に撮りて指を搦ふ。」と述べているのも、忠直でありながら悲劇的生涯を送らなければならな

かったことを痛み悲しんでいる。「痛む」とか「悲しむ」というからにはここに出て来る人物はもつと幸福な境涯になって然るべき筈であるとも考えているのであつて、人間の運命に對する問いかげを根柢に含むものである。司馬遷は史記の伯夷叔齊列傳で、天道はいつでも善人に與するといふが、伯夷叔齊のように仁を積み行いを潔白にしなから、餓死せねばならなかつたのはどうしてかと疑っている。しかし、彼の「士の不遇を悲しむの賦」では、「理據るべからず、智恃むべからず、福の先を造る無かれ、禍に觸るる無かれ、これを自然に委ねて終に一に歸す」と老莊の世界の中に安住の地を見出だしている。班固の「幽通の賦」では、天道の恣意性はみとめるが、人間の努力次第で天命さえも變え得るとする。その賦に、「天網の紘覆を觀るに、實に謙を契けて相訓ふ。先聖の大猷を諷るに、亦徳に隣ありて信を助けしむ。……精靈に通じて物を感じしめ、神氣を動かして微に入る」とあるように精誠であれば、神道の幾微に觸れるという。潘岳は人間の努力や意志を重んじ、徳と福とが一致する世界を理想とするが、それが現實にはもろくも崩れ去ってしまうのをいたむ。崩れ去つても更に求めつづける姿勢をとる。無常を根柢で把握しながらも、現實を捨てない生活態度がある。高祖の廟に寄り、

長山に造りて慷慨し、龍顏の英主を偉とす。胸中豁として其れ洞開し、羣善湊りて必ず擧る。威格を天區に存し、亡墳掘られて響がるるなし。坎を埒ふに臨みて、累ねて抃し、毀垣を歩みて延佇す。

と高祖の生前の偉業を想い起し、死後の空しさ、はかなさをかきしめてゐる。しかし、只そうするばかりでなく、周の故都を過ぎては、

鄠鎬を徘徊し、渴するが如く、飢ゑたるが如し。心翹翹にして以て仰ぎ、敬を加えずして自ら祇しむ。……靈臺を經始して、これを成

すこと日ならず。惟れ鄩と鄙、扱は其の室を京にす。……

と當時の善政を偲ぶ。この賦では、このあと、「永くこの邦を惟ひ、云に誰かこれを識らん。越に略聞くべきも、その極に臻り難し」と現實の世界に立ち返り、人の上に立つものが、信を杖つき、無欲であれば必ず、民の風俗が醇化すると述べ、彼自身もこれを理想とする。これは先にあげた彼の「河陽縣の作」の詩の末尾に「人に君たるの徳無きと雖も、民を視るに、庶くば忒からざるを。」と任に在っては誠實を盡くしたいといい、また「德縣に在りて作る」の詩の末尾に「祇みて社稷の守を奉じ、恪居して職司に處る」とあるのと同じく政治に對して前向きな姿勢が窺われる。こうした理想と現實との間にたゆとう微妙な人間心理を描いたものが、「西征の賦」であると考えられる。

その心理のゆれは、疑問、反語、讓歩等の句法によって巧みに表現されている。周末の諸王について「豈時王之僻なからんや、先哲に頼りて以て長く懋んなり。」と述べたり、秦の穆公について「豈虚名の立つべけんや、良に覇を致す、以有り」と述べたりしているのがその例であるが、まどめの表現として用いている。それが賦の内部で、韻と同じように、くり返して用いられ、美しい旋律を作っている。